第十九講　古文の読解②

Step 1

一　次の文章を読んで、後の問一～問四に答えなさい。

前の大和（やまと）の守（注）時賢（ときかた）が墓所は、長谷（はせ）といふ所にあり。そこの留守する（墓守をする）男、くくり（わな）をかけて鹿を取りけるほどに、或（あ）る日、大鹿かかりたりける。この男が①思ふやう、「くくりにかけてとりたらん、念なし（捕まえるのはたやすいことだ）。射殺したりといひて、②弓の上手のよし人に聞かせん」と思ひて、くくりにかけたる鹿に向ひて（注）大雁股（おおかりまた）をはげて（つがえて）射たりけるほどに、その矢、鹿にはあたらずして、くくりにかけたりけるかづら（つな）にあたりたりければ、かづら射切られて、③鹿はことゆゑなく（なんなく）走りにげてゆきにけり。この男、かしらがきをすれども（頭をかいて悔しがったが）、さらにえきなし（どうにもならなかった）。

（「古今著聞集（ここんちょもんじゅう）」より）

（注）時賢…源時賢（みなもとのときかた）（人名）
大雁股…矢の種類の一つ。

問一　傍線部①の「思ふやう」を**現代仮名遣い**に改めなさい。

思

問二　傍線部②「弓の上手のよし人に聞かせん」はここではどういう意味か。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　弓が上手であることを人に言いふらそう。
イ　弓が上手であることは内緒にしておこう。
ウ　弓の上手な人に言って助けてもらおう。
エ　弓の上手な人にはこの腕前を秘密にしよう。

問三　傍線部③「鹿はことゆゑなく走りにげてゆきにけり。」について、次の1、2に答えなさい。

1　なぜ鹿は逃げることができたのか。**二十字以上、三十字以内**で答えなさい。

2　これは、男のどのような気持ちがもたらした結果といえるか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　道徳心　　イ　向上心　　ウ　嫉妬心　　エ　虚栄心

問四　次のア～エの故事成語（中国の古典から生まれた言葉）の中で、この話が伝えていることと最も近いものはどれか。一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　推敲　イ　矛盾　ウ　蛇足　エ　五十歩百歩

□

【島根県】

Step 2・3

二　次の文章は、「古今著聞集」の一節である。注を参考にしてこれを読み、問い(1)〜(5)に答えよ。

①少将の内侍、②台盤所の③御つぼのかへでの木を見出して、「このかへでに、ａはつもみぢのしたりしこそ失せにけれ」とｂいひたりけるを、④頭の中将聞きて、「いづれの方にか候ひけむ」とて、梢を見あげければ、人々もみなめをつけて見けるに、⑤蔵人永継とりもあへず、「西の枝にこそｃ候ひけめ」と申したりけるを、⑥右中将実忠朝臣、⑦御剣の役のために参りて、おなじくその所に候ひけるが、この言を感じて、「この比は、これほどの事も⑧心とくうちいづる人はかたきにてあるに、⑨優に候ふものかな」とて、うちうめきたるに、人々みな⑩入興して⑪満座感歎しけり。まことに、とりあへずいひいづるも、またｄ聞きとがむるも、いと優にぞ侍りける。⑫「古今」の歌に、

　おなじ枝をわきて木のはの色づくは西こそ秋の初めなりけれ

と侍るを⑬おもはへていへりけるなるべし。

（「新潮日本古典集成」より）

注
① 少将の内侍…中務大輔藤原信実の娘
② 台盤所…女房が食事の準備をする場所
③ 御つぼ…お庭
④ 頭の中将…藤原宣経
⑤ 蔵人永継…藤原永継
⑥ 右中将実忠朝臣…藤原実忠
⑦ 御剣の役…天皇が外出する時に剣を両手で持って従う役
⑧ 心とくうちいづる…察しがよく言葉にして言い出せる

⑨ かたきにてあるに…めったにいないのに
⑩ 入興して…たいしたものだと喜び楽しんで
⑪ 満座…その場にいる人全員
⑫ 「古今」の歌…「古今和歌集」に収められている和歌
⑬ おもはへて…考えついて

Step 2

(1) 本文中のａはつもみぢのしたりしこそ失せにけれの解釈として最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 初めて紅葉を見た人がいなくなってしまったなあ
(イ) 初めて紅葉を見た場所がなくなってしまったなあ
(ウ) 初めて紅葉していた木が見当たらなくなってしまったなあ
(エ) 初めて紅葉していた葉が散ってしまったなあ

Step 3

(2) 本文中のｂいひたりけるは歴史的仮名遣いで書かれている。これをすべて現代仮名遣いに直して、平仮名で書け。

Step 3

(3) 本文中のc侯ひけめのように、「係り結び」によって結びの部分が変化しているものは、本文中の二重傍線部（‖）のうちどれか、最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 申したりける　(イ) 候ひける　(ウ) 侍りける　(エ) いへりける

Step 3

(4) 本文中のd聞きとがむるとは、「直ちに気づいて感心したということ」という意味であるが、だれが感心したのか、最も適当なものを、次の(ア)～(オ)から一つ選べ。

(ア) 少将の内侍　(イ) 頭の中将　(ウ) 人々　(エ) 蔵人永継　(オ) 右中将実忠朝臣

Step 3

(5) 次の会話文は、本文について、花子さんと太郎さんが話し合ったものの一部である。これを読み、後の問い㊀・㊁に答えよ。

花子さん　昔は五行説といって、方角と季節が対応しているという考えがあったそうだよ。たとえば、南は夏と対応しているんだって。
太郎さん　「西の枝にこそ候ひけめ」という言葉は、五行説から考えると理解できるね。「『古今』の歌」にあるように、同じ木の枝でも、紅葉は［　　］と思いついたから、とっさに言えたんだろうね。
花子さん　筆者の感想が書かれている本文の後半からは、筆者が感心している様子がわかるね。
太郎さん　感心したからこそ、こうして書き遺そうと思ったんだろうね。

㊀ ［　　］に入る適当な表現を、本文の内容をふまえて、**五字以上、十字以内**で書け。

㊁ 後半について、本文は、具体的なエピソードが書かれている前半と、筆者の感想が書かれている後半の二つに分けることができる。後半が始まる一文を本文中から抜き出し、**初めの四字**を書け。

【京都府】

〈Note〉

第十九講　古文の読解②

Step 1

一

解答

問一、(思)うよう　問二、ア　問三、1、男の射た矢がそれて、わなをつないでいたつなを切ったから。(28字)(同意可)　2、エ

問四、ウ

解説

問一、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」を「わ・い・う・え・お」にし、「au」は「ou」と発音するので「やう」は「よう」にする。

問二、「よし」は「事情。事がら」の意。「せ」は「～させる」という意味の使役の助動詞。直訳すると「弓が上手であるということを人に聞かせよう」になる。

問三、1、弓が上手だと言いふらすために放った矢が、「鹿にはあたらずして…かづら射切られて」となったことをおさえる。2、本当はわなを仕掛けて鹿を捕らえたのに、射殺して「弓の上手」に見せかけようとした気持ちから、鹿には逃げられる結果になっている。

問四、男がわなを仕掛けて鹿を捕らえたままではよかったが、わざわざ矢を射たことで鹿を逃がしてしまったという話。付け加える必要がない余分なもの、という内容を伝えている。

口語訳

前の大和の国守であった源時賢の墓地は、長谷というところにある。そこの墓守をする男が、わなを仕掛けて鹿を取っていたところ、ある日、大鹿がかかった。この男が思うことには、「わなにかけて捕まえるのはたやすいことだ。射殺したと言って、弓が上手であることを人に言いふらそう」と思って、わなにかけた鹿に向かって大雁股という矢をつがえて射たところ、その矢は、鹿には当たらず、わなにかけていたつなに当たってしまったので、つなが射切られて、鹿はなんなく走って逃げていってしまった。この男は、頭を

かいて悔しがったが、どうにもならなかった。

Step 2・3

二

解答

(1) (エ)　(2) いいたりける　(3) (ウ)　(4) (オ)　(5) ㈠ 西の枝から始まる（同意可）　㈡ まことに

解説

(1) 「はつもみぢ」は、秋になって初めて色づいたもみじのこと。「失せに」は、そのもみじが散ったことを表している。

(2) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

(3) 「係り結び」は、「ぞ・なむ・か・や」という係助詞に呼応して結びが連体形、「こそ」という係助詞に呼応して結びが已然形になるという法則である。「ぞ」という係助詞が使われている文に着目する。

(4) 蔵人永継が「西の枝にこそ候ひけめ」と言ったことに感心し、「この比は…優に候ふものかな」と言った人物である。

(5) ㈠ 紅葉した葉の場所を答えていることや、「木のはの色づくは西こそ秋の初めなりけれ」という「『古今』の歌」に着目して考える。㈡ 右中将実忠朝臣が言ったことに、みんながそのとおりだと感心したというところまでが、具体的なエピソードを述べた部分になっている。

口語訳

少将の内侍が台盤所のお庭のかえでの木を見つけて、「このかえでに初めて紅葉していた葉が散ってしまったなあ」と言ったのを、頭の中将が聞いて、「どちらの方でございますか」と言って、梢を見上げたところ、人々もみな注目して見たところ、蔵人永継がすぐに、「西の枝でございましょう」と申し上げたのを、右中将実忠朝臣が、御剣の役のために参って、同じくその場所に控えていたのが、この言葉に感心して、「この頃は、これほどの事も察しがよく言葉にして言い出せる人はめったにいないのに、りっぱなことだ」とため息をついたところ、人々はみなたいしたものだと喜び楽しんで、その場にいる人全員が感心した。ほんとうにすぐに言い出したも

のも、まただだちに気づいて感心したということも、たいへん立派なことです。「古今」の歌に
　同じ枝を分けて木の葉が色づくのは、西こそ秋の初めであることだ
とあるのを考えついて言ったものなのでしょう。